

後半期の須恵器

——平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成——

宇野 隆 夫

【要約】 平安京・京都から出土する九〜一四世紀の須恵器は当初は多様な器種から成っていたが、九世紀中頃〜末を境とし一〇世紀以後は限られた器種に用いるようになる。このことは須恵器の単なる衰退を示すのではなく、各種の土器・陶磁器の特性を生かし、用途に応じて使いわけた畿内の中世的土器様式が成立していく一つの現われとみなすことができる。そしてその過程には、生産地での多様な製品のうち特定の器種が広く流通する段階から、生産地において広域流通用の器種を集中的に生産する段階に移るという重要な展開を含んでいる。またこの時期は畿内が窯業生産の中心地としてより、瀬戸内・東海地方の窯業製品の消費地としての役割を高めた時代であった。そしてそれは窯業における生産・流通・消費の体制が大きく変わるとともに、中世後期・近世の発展を基礎づける時代でもあった。

史林 六七卷六号 一九八四年十一月

はじめに

平安京は最後の古代都市であるとともに、中・近世都市に発展した稀有の例である。そのためこの地から出土する考古資料は、その変容過程を如実に示すものが多い。そして多くの種類の遺構・遺物の中でも、食器（土器・陶磁器）は人々の生活に欠かせない食にかかわるものであり、都市の人々がこれをどのように調達してどのように用いたかには重要な歴史が潜んでいる。

各種の土器・陶磁器の中でも、須恵器は五世紀に生産が始まって以後、約千年の長期にわたって重要な役割を果たした

が、その内容は前半期（五～九世紀）と後半期（一〇～一四世紀）とでかなり様相を異にする。

本稿でとりあげる平安京・京都という消費地出土の須恵器の変化は、器種が多様であった前半期の最後の段階（九世紀）から、ごく少数の器種に限られる後半期の最後の段階（一四世紀）に至る過程である。そしてこの時期を生産地の側からみると多くの器種を一括生産した段階から特定の器種を大量生産した段階へ、流通という点に着目すると畿内に供給力があつた段階から西国に供給をおおいだ段階へという変化を内包している。またこれらの変化は国産土器・無釉陶器・施釉陶器の動向や中国製陶磁器の輸入とも密接な関係をもっていたであろう。

本稿はこのような視点から、平安京・京都出土の須恵器を編年し、その変化に私なりの歴史的評価を与えようとするものである。

① これは畿内地方についてのものであり、畿外においては須恵器の消滅がこれより早い地域と遅い地域とがある。

一 研 究 史

須恵器は源流を中国の灰陶に、直接の起源を朝鮮陶質土器にもち、五世紀に生産が始まった。① 窯を用いて還元・煨焼したこの須恵器は青灰色・硬質の土器であり、一四世紀末に至る約千年の間、日本とりわけ畿内の食器の中で重要な役割を果たした。

この須恵器の長い歴史のうち最初の五〇〇年間（五～九世紀）については、古墳や窯址・古代の宮都からの出土例が多く、古くから多数の論考がなされている。② そして多くの先学によって精緻な編年研究が確立された結果、生産地の動向や生産体制、生産技術、製品の構成の変化の意義、製品の流通、土師器との器種分業等についても研究がなされるようになった。ここではその研究成果について詳しく述べることはできないが、原口正三氏・田辺昭三氏・西弘海氏をはじめとする方々③の見解をまとめ、畿内を中心とする前半期の須恵器を次の四期に大別して把握しておきたい。

Ⅰ期（須恵器生産開始～高蔵四七型式、五世紀）…須恵器の出現と日本的な定型化。

Ⅱ期（陶器山一五型式～高蔵二〇九型式、六世紀）…畿内南部の供膳・貯蔵用器種において須恵器が卓越してくること、及び葬祭供献用需要の増大。

Ⅲ期前半（七世紀初め～七世紀第Ⅲ四半期）…大陸系金属製容器の模倣に起因する供膳用器種の構成の変化。食器需要の増大と畿内南部における土師器の再進出。

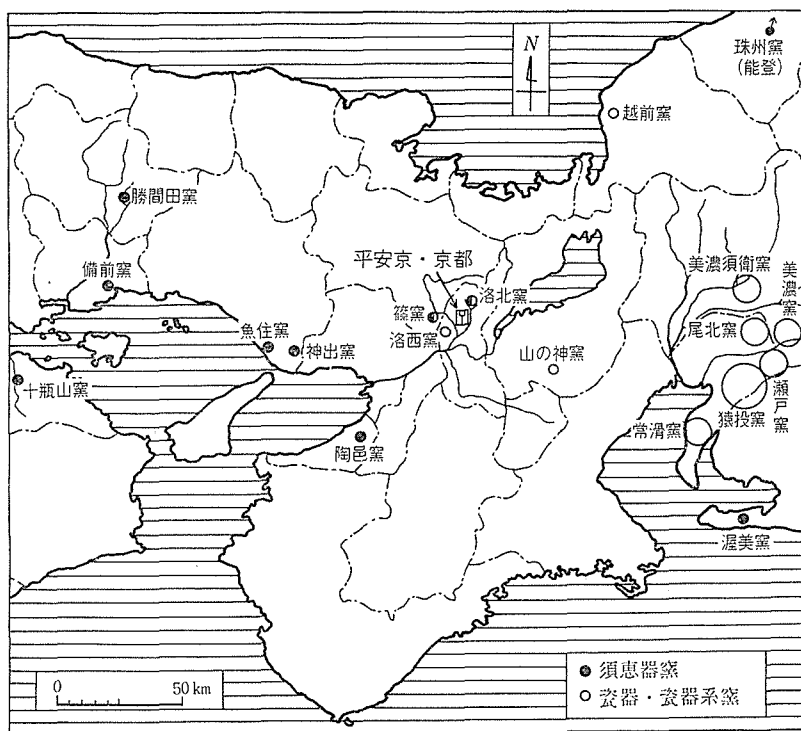
Ⅲ期後半（七世紀第Ⅳ四半期～八世紀前半）…土師器において先行した法量の大小による器種の分化という現象の須恵器への波及、土師器と須恵器の各器種間における互換性の確立。

Ⅳ期（八世紀後半～九世紀末）…供膳用器種における須恵器の比率の低下と法量による器種の分化の不明確化。

以上の変遷の中ではⅡ期とⅢ期の変化が特に大きな画期であるとともに、Ⅲ期後半の様相が古代律令制社会の食器のあり方を最もよく現わしているという西弘海氏の見解を重視したい。

これらの秀れた研究を生んだ前半期の須恵器に比べて、後半期の須恵器は高い評価を与えられることが少なかった。このことは田辺昭三氏が、八世紀中頃以後を須恵器の衰退過程の諸段階であり、もはやその中に画期点を求めて大区分することは妥当でなく、また畿外で畿内より遅くまで須恵器生産が続くことは施釉陶器の普及が遅れた地域における地方的現象であるとして示されていることによく示されている^⑦。この見解は和泉陶邑窯のような畿内を代表する須恵器生産地の動向の理解には非常に有効であるが、須恵器の果たした歴史的な役割を考えるには充分でない。

これに対して中世に須恵器と同様の焼物が存在することを明らかにし、その歴史的な位置づけを行なったのは檜崎彰一・吉岡康鴨両氏である。吉岡氏は北陸の珠洲系陶器（二世紀中頃～一五世紀）が須恵器の諸特徴を備えながらも商品としての性格を強くもつようになり、一三世紀末以後、器種を減じて生産量を増大させるとともに、北陸地方ばかりでなく北海道南部にまで拡まったことを明らかにした^⑧。また檜崎氏は中世の焼物全体を土師器系・須恵器系・甕器系の三種に体系づけ、須恵器系には（1）酸化焰焼成に転じる須恵器系第一類陶器、（2）須恵器の生産技術をそのまま継承した須恵器系第二類



第1図 平安京・京都と主要窯址の位置

陶器（須恵器）があることを示した。そしてこれらのうち須恵器系・瓷器系の諸窯はそれぞれの地域的条件にもとづく差異をもちながらも、農民の生活に密着した壺・甕・すり鉢を生産したが、このことが中世窯としての特色を示し、その生産体制はほぼ一二世紀に確立することを明らかにした。^⑩さらに橋崎氏は胎土分析にもとづく製品の流通圏の研究を進め、西国の中世須恵器が京都にまでもたらされていることを確認した。^⑪このことによって西国の須恵器生産が、在地の農民ばかりでなく畿内の都市に住む人々の生活をも支えていたことが、明らかになったのである。

私はこの橋崎・吉岡両氏の研究を出発点としつつ、畿内にあっては一二世紀の窯業生産地における中世的転換以前に、その変化が生じる原動力の一つとなった都市における需要と流通体制の変革があったことを示したい。そして後半期の須恵器は器種が減少する方向

を迎えるがそれは単なる衰退ではなく、古代よりはるかに高度で複雑となった食器複合の形成過程の一つの現われであること、及び須恵器の最後の段階（一四世紀）の様相に中世後期・近世への展開の萌芽があることを論じたい。

なお私が九世紀末・一〇世紀初頭をもって須恵器を前半期と後半期とに大別する理由は器種の構成に大きな変化があるばかりでなく、田中琢氏が示すようにこの頃に中央権力が管掌していた畿内の古い生産供給体制が行きづまり、異質な体制に転換していったと考えるからである。ただ本稿で示す平安京・京都出土の須恵器の変化はあくまで平城京・長岡京における様相の延長線上に位置づけて解すべきものである。宮都以外、とりわけ畿外諸地域に目を転じると須恵器の様相とその果たした役割とにかなりの差異があるという点が重要な課題として残されている。

① 原口正三「須恵器の源流をたずねて」『古墳と國家の成立』古代史発掘第六卷、一九七五年

原口正三『須恵器』日本の原始美術4（一九七九年）

② 近世以来の須恵器研究史は田辺昭三氏の労作に詳しい。

田辺昭三「須恵器研究小史」『須恵器大成』一九八一年

③ 前掲注①文献。

④ 前掲注②文献。

⑤ 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、一九八二年

⑥ 以下で示す暦年代については、五世紀末がⅠ期末かⅡ期初頭かというような問題を常に含まれているが本稿では目安として示すのにとどめたい。

⑦ 注②前掲文賦。

⑧ 中世をどのように定義し、いつからいつまでを中世と呼ぶかは難しい問題である。本稿では仮にこれを一二世紀中頃～一六世紀中頃とす

るのにとどめ、それとは別に考古資料における中世的様相の形成過程の一端を明らかにすることを目的とする。

⑨ 吉岡康鴨「珠洲古窯について」『北陸の古陶』一九六七年

吉岡康鴨「加賀・珠洲」『越前・珠洲』日本陶磁全集第七卷、一九七六年

吉岡康鴨「中世陶器の生産と流通——北東日本海域の珠洲系陶器を中心に——」『考古学研究』第二七卷第四号、一九八一年

吉岡康鴨「中世陶器の生産と流通(2)——北東日本海域の珠洲系陶器を中心に——」『考古学研究』第二八卷第二号、一九八一年

⑩ 檜崎彰一編『日本の陶磁』第3巻（一九七四年）

檜崎彰一編『日本の陶磁』第2巻（一九七五年）

⑪ 檜崎彰一・山崎一雄・飯田忠三・内田哲男「陶磁器の釉薬及び胎土の成分からみた産地同定の研究」『昭和五三年度特定研究「古文化財」年次報告書』一九七九年

⑫ 田中琢「畿内と東国」『日本史研究』第九〇号、一九六七年

二 平安京・京都出土の須恵器

本章では平安京・京都から出土する九～一四世紀の須恵器について、一〇〇年を三期に区分する精度で器種構成と型式の変化とを記述するが、まずそのためのいくつかの前提を示すことにする。

遺物の年代を決定する場合に、少数の資料では年代を細かく限定することが多い。従って、消費地である平安京・京都においては、一括遺物の年代を出土遺物の主体をなす土師器によって決定することが多い。

土師器の年代に関して、私はかつて平安京Ⅰ～Ⅳ期・中世京都Ⅰ～Ⅳ期の大別を行ない、その各期がほぼ九世紀から一六世紀に至る各一〇〇年にあたること、及び各期を少なくとも三小期に分けることができることを示した。^①その後、暦年代を知る手掛かりのある資料が若干増加したが、^②それはこの年代観を補強するものであった。ただし今後の調査の進展によって年代観の若干の変更もありうるため、正確な年代表記は土師器の時期区分名によるべきであろう。しかしそれは考古学以外の分野の研究者にとって論旨の理解を難しくするため、本稿では一つの便法としてこれを西暦年代におきかえて表記することにした。

また重要な問題は、ある時期の土師器に共伴する須恵器を集成すると、^③一器種が単一の型式のみから成るものではないという点である。この理由としては使用期間の差から新古のものが同時に廃棄された場合、複数の産地から供給された場合、同一産地の同一時期に数種のもものが生産されていた場合等を想定できるが、その識別は必ずしも容易でない。しかしここでそのすべてを同等に示すことはかえって混乱を生じるため、各期毎にその時期を最も代表するものを中心にして記述を進めることにする（第二～八図）。

これらの諸点を前提とし、最初の作業として須恵器の様相を一〇〇年毎に示すことにしよう。なお器種の名称は奈良国立文化財研究所の用法に従っている。^④また資料出土地の現住所の記述を省略したが、報告文献を稿末にまとめたので参照

されたい。

(1) 九世紀の須恵器(第二・三図)

九世紀の須恵器の器種には杯B(高台付杯)、杯B蓋、皿B(高台付大型皿)、皿C(無高台扁平皿)、杯A(無高台杯)、皿A(無高台皿)、碗A(無高台碗)、壺L(長頸壺)、壺N(耳付長頸壺)、壺G(細身糸切底壺)、壺A(葉壺形壺)、壺A蓋、壺E(広口壺)、鉢A(鉄鉢形鉢)、甕A(有頸甕)、甕C(広口甕)、盤A(無高台盤)がある。なお資料の制約から九世紀中頃・末については図示しえた器種がやや少ないが、皿B・皿C・碗A・壺G・壺E以外は九世紀を通じて存在する。平安京造営開始後(七九三年以後)と九世紀初めの資料としては、平安宮内裏外郭跡SX四・九、平安宮左兵衛府跡SD四、平安京右京一条三坊九・十町SD四五・SD一五三、平安京右京二条二坊(三)SE三、平安宮主水司跡A区SX一・B区SK八、平安宮中務省SK二〇一、の各出土品がある。これらのうち前四者が当期の古い様相を、後二者が新しい様相を示している。

九世紀中頃の資料は、北野廃寺SK二三、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡(以下では烏丸線と略す)No四九土壙六一、同No六溝一出土品が相当し、平安京西寺井戸跡にも当期の資料が多い。

九世紀末の資料は、北野廃寺SK二〇・二二、平安宮中務省SD一、京都大学教養部構内AP二二区SK二五七・二六五があり、平安京右京一条三坊九・十町SG一七七B、平安京左京八条三坊SD二九Aにも当期の資料が多く含まれている。

杯B蓋 九世紀の杯B蓋は天井部がゆるやかな丸味をもち、縁部近くで屈曲するものが多い。ただし非常に扁平なものや、天井部から屈曲部までが直線的なものもある。つまみは九世紀初めには宝珠状・円盤状のものが多く、環状のつまみも少数ある。九世紀中頃にはつまみのないものが現われはじめ、九世紀末にはほとんどの蓋がつまみを消失する。調整は九世紀初めにおいては、多くのものに外面に篋削りを施すが、次第にこれを省略し、九世紀末には篋切り後に撫でのみ施すものが多い。大きさは杯Bの項で示すが大型品の減少と口径の大きさによる分化が明瞭でなくなるといふ動きをたどる。

杯 B

杯 B は体部がゆるやかに外傾し、体部と底部の境の位置に断面方形の高台がつく。高台は九世紀初めにはわずかに外方に踏んばる高台を底部と体部の境よりやや内側につけるものがあるが、次第に作りが粗雑になり、九世紀末には矮小化した高台を底部と体部の境の位置につける。法量は九世紀初めには口径一九 cm・器高七 cm 程度から、口径一一 cm・器高四・五 cm 程度の範囲に四つのもとなりがあるが、その区別はやや明瞭でなくなりはじめている。九世紀中頃以後は充分な数量にめぐまれた一括資料に乏しいが、九世紀末には口径一五 cm・器高六 cm 程度から口径一一 cm・器高四・五 cm 程度の範囲に分布し、大・小の二種がある。九世紀末の杯 B は一〇世紀の碗 A に転換する直前の形態を示している。

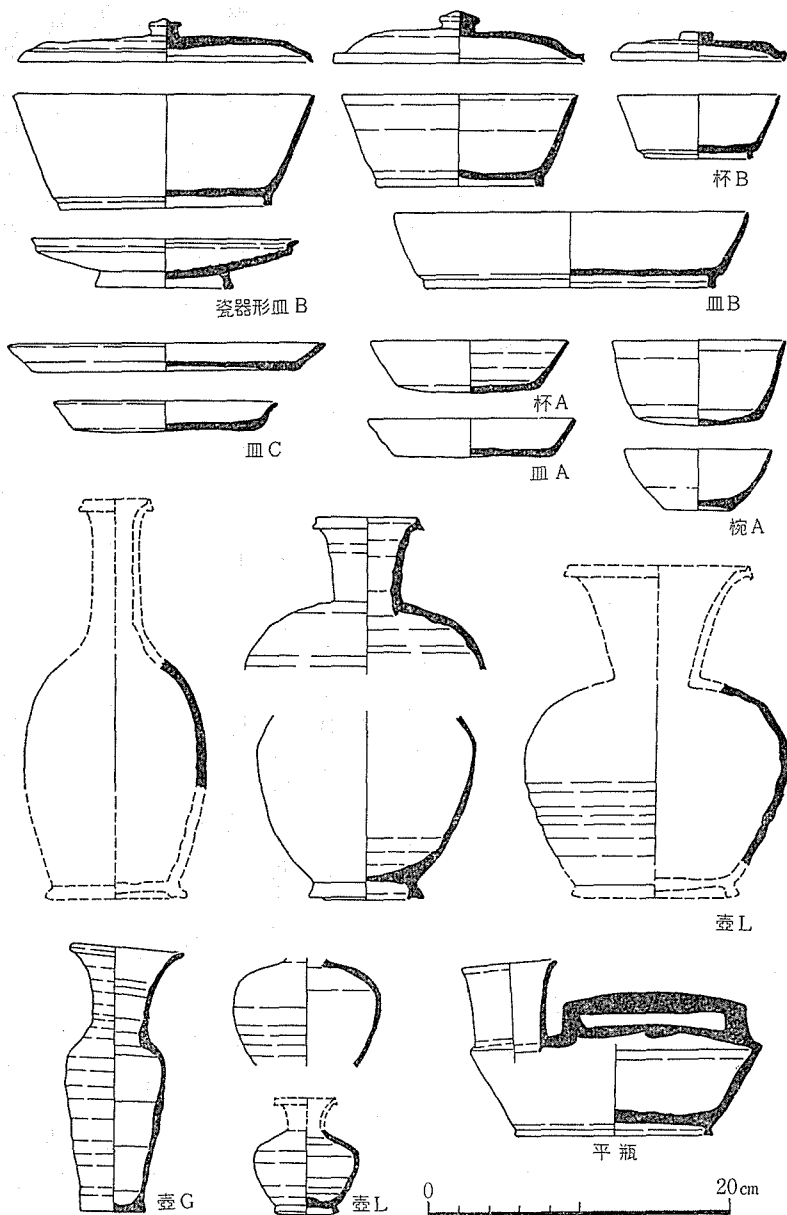
皿 B 杯 B と同様の特徴をもち、口径二〇 cm 余り・器高五 cm 程度の八世紀末・九世紀初頭に属するものが少数ある。⁽²⁾このほかに体部と底部の境が屈曲せず、口縁部が屈曲する瓷器形の皿 B がごく少数ある。⁽²⁾

皿 C 扁平な無高台の皿である。底部外面は多くは不調整であり、内面は丁寧な撫でを施すものと不調整のものがある。九世紀初めには口径二〇 cm・器高二 cm 程度のものと、口径一五 cm・器高二 cm 程度のものがあるが、九世紀中頃以後は確実な資料がほとんどない。

杯 A 杯 A は杯 B の体部と底部と同様の特徴をもつ。九世紀初めには底部はわずかに外方にふくらむか直線的であり、体部は斜め上方にまっすぐ立ち上がる結果、底部と体部の境が稜をなす。また底部外面を匏削りの後に丁寧な撫でを施すものと不調整のものがある。大きさは口径一二～一四 cm・器高三～四 cm 程度であり、法量による分化は明確でない。九世紀中頃～末には底径が口径に比べて小さくなり、体部が内彎して立ち上がるようになる。

皿 A 杯 A とほぼ同じ特徴をもつ。九世紀初めには口径一四 cm・器高三 cm 弱に中心があり、杯 A より径高指数が少ない。この器種は九世紀中頃以後には杯 A との識別が難しくなる。

碗 A 杯 A と同様の特徴をもつ。口径一一・五 cm・器高四・五 cm 程度の八世紀末・九世紀初頭に属するものが少数ある。⁽²⁾またこれより小型で糸切底のものが一例ある。九世紀中頃以後には確実な例がなく、一〇世紀の碗 A とは系譜を異にする。



9世紀初めの須恵器（縮尺 1/5）

壺 L 丸い胴部と上方にひらく筒形の口頸部とから成る壺である。九世紀初めには原則としてほとんどのものに外方に踏んばる高台がつき、口縁端部が外方と内方に鋭く拡張する。また法量は大きくは大・小にわかれるが、器高二〇 cm 余りから八 cm 程度の間色々の大きさのものがある。九世紀中頃には口縁端部の拡張部が鋭さを減じる。小型のものは高台がなくなり、大型のものにのみやや作りが粗雑な断面方形の高台がつく。また法量は、器高二〇 cm 程度の大型のものと器高一 cm 前後の小型のものに別かれる傾向が現われる。九世紀末には胴部下半が細長くなる反面、口頸部が短くなり口縁端部を上方につまみ上げるものが増す。また大型のものにも小型のものと同様に高台をつけないものが現われる。

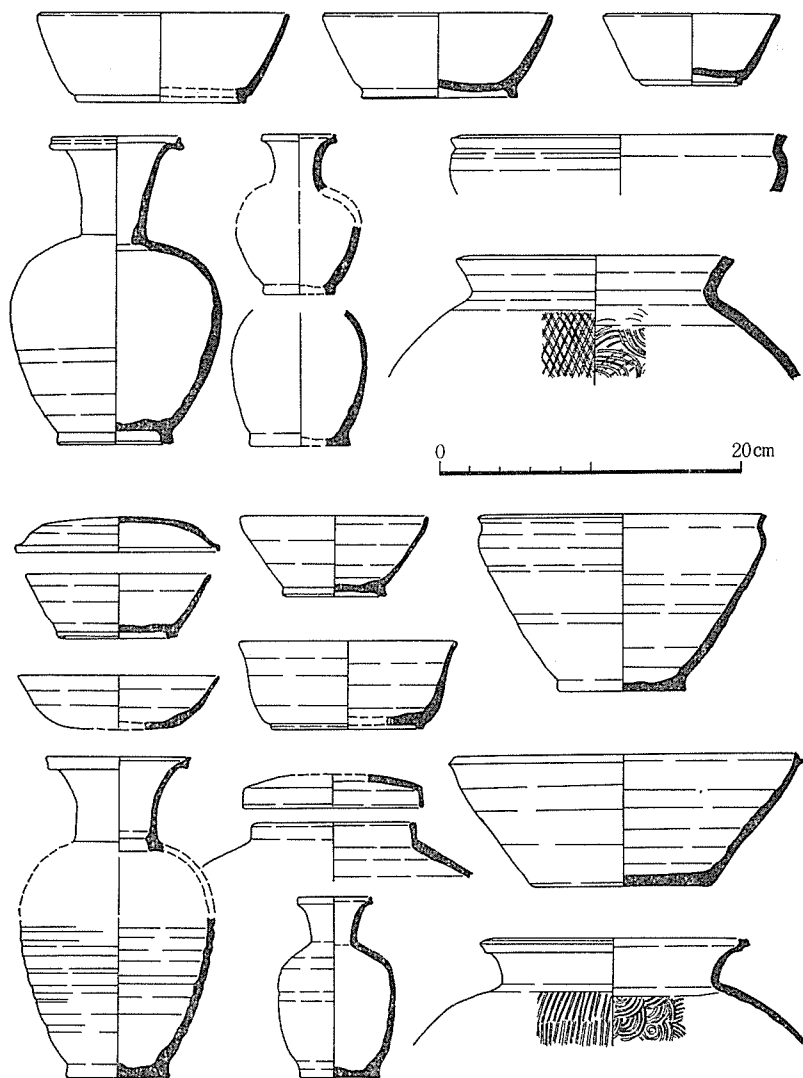
壺 N 壺 L の肩に両耳をつけたものや、三耳をもつもの及び耳付短頭壺や把手付瓶が九世紀末を中心とする資料に含まれる例があるが、変化をたどるには出土例が少ない。

壺 G 細長い胴部に、外反して端部を丸くおさめる口頸部がつくが、この特徴は時期が降るほど顕著である。高台はなく、底部外面は糸切り後不調整である。九世紀初めに類例が多く、九世紀中頃以後にはほとんどなくなる。

壺 A 球形の胴部に短かく直立する口縁部がつく。天井部が扁平で縁部が直角に屈曲する蓋と組合わせて用いる。九世紀初めには胴部の肩が張り、底部と胴部の境の位置に外方に踏んばる高台がつく。法量は器高二〇 cm 余り・胴部最大径二五 cm 程度の大型のものから、器高七 cm 余り・胴部最大径一〇 cm 程度の小型のものまである。九世紀中頃末にかけて大型のものは胴部が球形に近くなり、小型のものは肩部が直線的になる。九世紀末には小型のものを中心として高台と宝珠状つまみのないものが多い。

壺 E 口縁部が内側に屈曲し、さらに上方に短く屈曲する広口の壺である。天井部が丸味をもち縁端部が下方に短く屈曲する小型の蓋は壺 E と組み合わせ用いたものであろう。土師器・黒色土器に多い器形であり、九世紀中頃以後は出土例が少ない。

平瓶 提梁と高台のある平瓶が九世紀を通じて存在するが出土例は少ない。胴部最大径が二〇 cm 余のものと一五 cm 弱の



第3図 9世紀中頃～末の須恵器（縮尺より上が9世紀中頃，下が9世紀末，縮尺 1/5）

ものがあり、時期が降るほど壺と同樣に胴部が上下にのびる傾向が現われる。

鉢 A 口縁部がゆるやかに内傾する鉄鉢形の鉢である。底部は尖底であろう。九世紀中頃以後の出土例が少ないが、九世紀を通じて少量は存在した可能性がある。

盤 A 八世紀の資料と比べると底径の口径に対する比率が小さく、また片口をつけるものもあって、すり鉢に近い形態をとるようになる。九世紀初めには口縁端部が撫でによって凹み内方と外方に拡張するものと、口縁端部が面をなして外方に傾斜して拡張するものがあり、口径三五 cm 余・器高一二 cm 余を測るものが多い。以後は後者の特徴をもつものが主流になり法量を減じていく。九世紀末には口径三〇 cm 以下・器高一〇 cm 程度のものが多い。

甕 C 口頸部が屈曲して斜め上方に立ち上がる広口の甕である。九世紀初めには胴部が丸味をもち、ほとんどのものに底部と胴部の境の位置に外方に踏んばる高台がつく。法量は口径二五 cm 余・器高二〇 cm 弱から口径一五 cm・器高一〇 cm 程度のもので各種の大きさのものがある。九世紀中頃以後は胴部が直線的に立ち上がるようになり、口縁部の立ち上がりも短くなる。また法量は大型と小型とにわかれるようになる。九世紀末には高台をつけないものが多くなり、一〇世紀の鉢（すり鉢）に転換する直前の形態を示している。

甕 A 甕 A は色々の特徴をもつものがあるが、使用期間が長いいためか型式の変化をたどることは難しい。九世紀の甕 A に共通する特徴は胴部内面に顕著な同心円文を残すことである。外面には縦方向の平行叩きを施すものと、格子叩きを施すものと、この両者を施すものがあり、カキ目や篋削りを施すものも少数ある。口頸部は短く直立するもの・短く外傾ないし外反するものと、長く外傾・外反するものがあり、このうちでは口頸部が外反するものが主流になっていく。胴部は球形に近いものと、長胴で尖底に近い丸底をもつものが多く、平底のものはごく少数である。

その他 食器以外のものとしては陶硯がある。九世紀初めには円面透脚硯が多いが、風字二面硯や風字硯の脚がついた円面硯もある。^(二) 九世紀には円面硯と風字硯とが併存したであろうが、円面硯は脚部のすかしが少なくなるなど退化の傾向

が現われる。またこのほかに杯B蓋を硯に転用した例が多い。

小結 以上で各器種の変化を概観したが、九世紀の須恵器の器種は基本的には八世紀の構成を踏襲している。ただし供膳用の器種を中心にして法量による分化の不明確化と簡素化、大型品の減少、高台や調整の省略、若干の器種の減少という変化があり、これは八世紀中頃以後の動向の延長線上にある。そしてこの傾向が著しく顕著になるのは九世紀中頃である。九世紀と一〇世紀の境には須恵器において大きな変化があるが、それは九世紀中頃ゝ末の動きの帰結と考えるべきものである。

(2) 一〇世紀の須恵器（第四図）

一〇世紀になると須恵器の器種構成が大きく変化する。供膳用器種では碗・杯・皿がごく少量出土するが、土師器は勿論、施釉陶器と比較してもごく少ない量である。この中で小型の壺Ⅰは供膳用に用いられた可能性があり、出土例も多い。このように須恵器が基本的な供膳用器種から撤退していく反面、貯蔵用の大型甕のほとんどは須恵器が占める。また重要な問題は、中世のすり鉢に連なる形態をもつ須恵器鉢がかなり多く用いられることである。この器種は九世紀にすでに調理用のすり鉢として用いられた可能性もあるが以下ですり鉢と表記する。

一〇世紀初めの資料としては、平安京左京八条三坊二町G10P6、北野麁寺SD一二・SD一三第四層・SD一四出土品があり、平安京左京八条三坊SD二九B・C出土品にも当期の資料がある。

一〇世紀中頃の資料としては、平安宮左兵衛府SD一、平安京右京二条二坊SX一、烏丸線№三七ビット三六出土品があり、左兵衛府SD一が当期の古い様相を、右京二条二坊SX一が新しい様相を示している。

一〇世紀末の資料としては、烏丸線立合一七井戸一・№四八井戸二・№七八ビット五七、平安京右京二条二坊SE一、平安京左京内膳町SK一^(七)九出土品がこれにあたる。

すり鉢

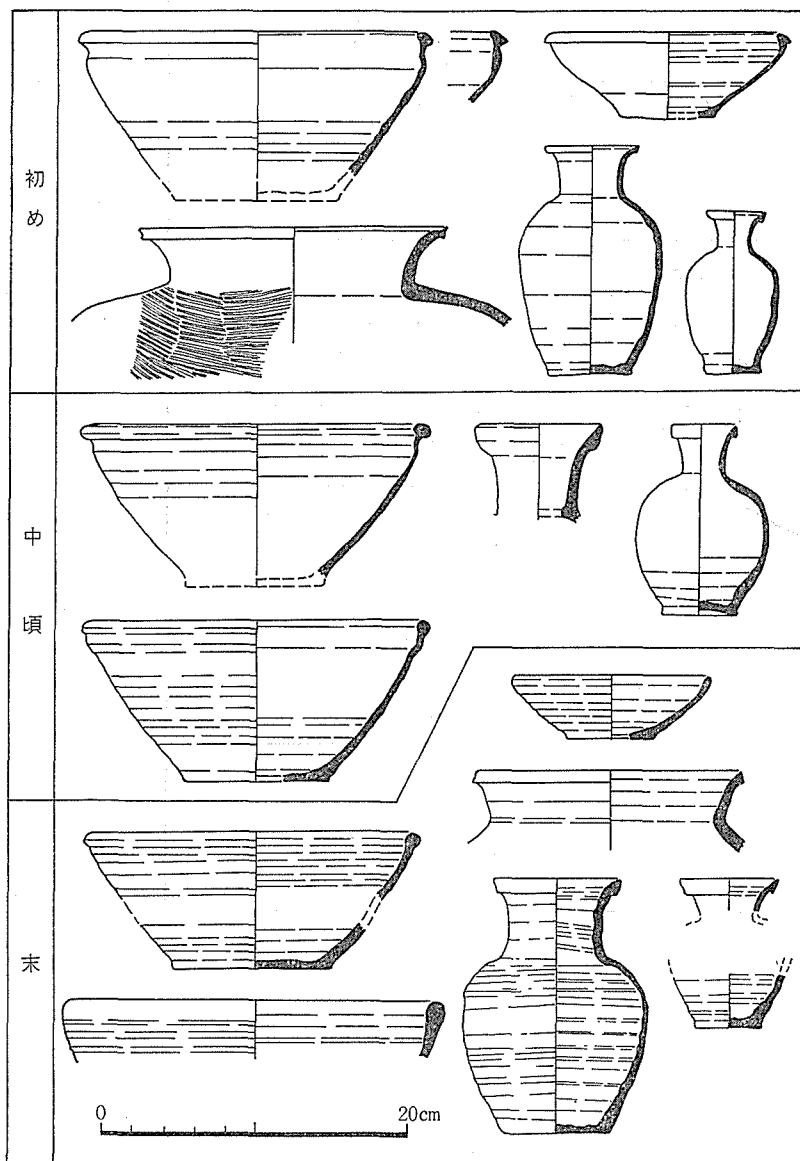
一〇世紀を特徴づけるものの一つは玉縁状口縁のすり鉢である。この器種は九世紀末の高台を消失した甕Cが

盤Aを吸収して生じたのであろう。一〇世紀初めには、口縁部がやや内彎し端部が断面三角状に外方に突出する甕Cの特徴を残すものもあるが口縁端部が内外面に玉縁状に拡張したものが多く、一〇世紀中頃には口縁部が屈曲して外反し端部が丸味をもった玉縁状になる。当期の前半には器壁が薄く玉縁部との境が明瞭であるが、後半には器壁が厚くなり口縁部の屈曲も弱く玉縁部との境がはっきりしなくなる傾向が現われる。一〇世紀末にはこの傾向が一層顕著になり、口縁部の屈曲がほとんどないものが多い。また口縁端部が玉縁状にならず面をなすものや内側に肥厚するものが少量であるが現われる。大きさは口径二五cm弱・器高一cm程度のものが多いが、口径一五cm弱・器高五cm程度の小型のものもある。また一〇世紀末には口径が二五cm以上のやや大型のものが現われる。調整は体部内外面に横方向の撫でを施し、底部外面には糸切り痕を残すものが多い。

壺 一〇世紀の壺はすべて高台がなく、底部外面は糸切り後不調整である。大きさは器高一五cm余の大型のものと、一二cm程度の小型のものがある。一〇世紀初めには口縁端部が上方に拡張し胴部はやや細長であるものが多い。一〇世紀中頃には口縁部下端が肥厚し、胴部が球形に近づく。また一〇世紀末には底径の胴部最大径に対する比率が高まる傾向が現われる。

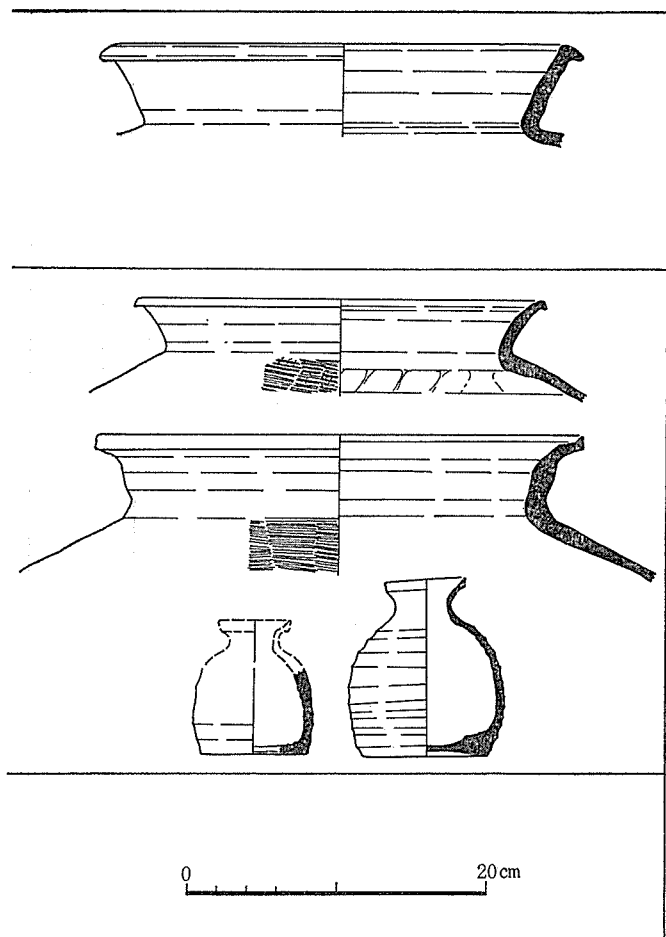
甕 一〇世紀の甕の一つの特色は内面の同心円文を撫で消すものが多く、品質を高める努力がなされていることであろう。口頸部はやや外反して端部が拡張するものと丸くおさめるものがある。また胴部外面には平行叩きを横位に施すものや撫でを施すものが多い。

小结 一〇世紀は、須恵器が供膳用の碗・杯・皿からほぼ撤退し、壺・甕・すり鉢に主力を移す重要な転換期である。ただしこの変化は畿内の消費都市におけるものであり、生産地においては供膳用器種も多数生産している。このことは流通のあり方の変化を考える上で非常に重要な意味をもっている。



第4図 10世紀の須恵器（縮尺 1/5）

(3) 一一世紀の須恵器 (第五図)



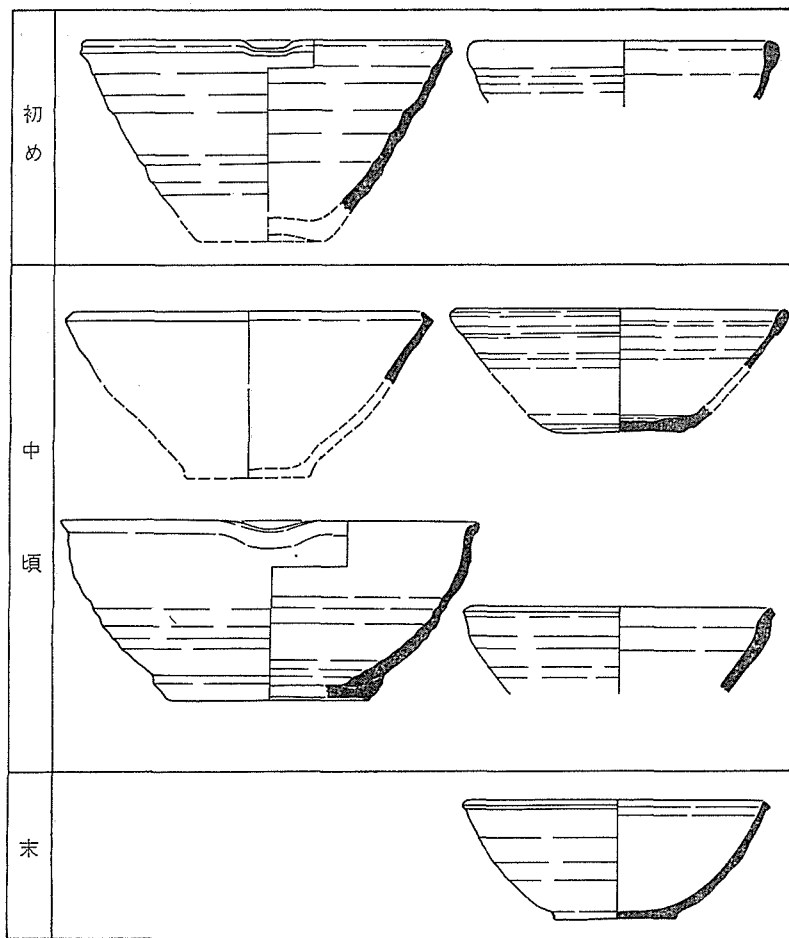
須恵器 (縮尺 1/5)

一一世紀の須恵器は、一〇世紀と同様に壺・甕・すり鉢を中心とするが、壺の出土が少なくなる傾向がある。

一一世紀初めの資料としては、平安京左京内膳町SK一八^(二七)、烏丸線№23土壙六^(二八)、平安京左京五条三坊十五町井戸B^(二九)、三

条西殿三条大路側溝IV出^(三〇)土品がある。

一一世紀中頃の資料としては、平安京左京三条三坊SD一^(三〇)、平安京押小路殿井戸二〇六直上土壙^(三一)、平安京左京四条三坊十三町SE五三一^(三二)、烏丸線立合一四土壙一一・№四二土壙四五・№四二土壙四八・№六七井戸七^(三三)、平安京左京内膳町SD四一A^(三四)出土品がある。以上の中では平安京左京三条三坊SD一出土品が当期の古い様相を、平安京左京内



第5図 11世紀の

膳町SD四一Aが新しい様相を示している。

一一世紀末の資料は、平安京左京四条一坊SE^三八出土品がある。他にも当期の資料はあるが良好な須恵器資料を含んでいない。

すり鉢 一一世紀のすり鉢は一〇世紀と異なり多様である。一一世紀初めには玉縁状口縁のすり鉢の系譜をひく口径二〇cm余・器高一〇cm弱のものが多いが、口縁端部が面をなして内側に肥厚する口径二五cm・器高一三cm程度の大型でやや深いものもある。一一世紀中

頃はこの両者を基本とするが、玉縁状口縁のものは玉縁が一層退化するとともに比率を減じる。また口縁端部が面をなし内側に肥厚するものに加えて、外側に拡張するものも現われる。この外に口縁部が外反して端部が面をなすものがあり、口径二〇cm程度の小型のものと、口径二五cm余の大型のものとがある。一一世紀末には資料が少ないが、口径二〇cm・器高八cm程度のやや浅いもので口径端部が外面とほぼ直角をなし外方に拡張するものがある。前後の時期の資料から判断して、この特徴をもつ大型のもの、口縁端部を丸くおさめるもの、口縁部が外反し端部が水平に近い面をなすものもあったと推測する。

壺 壺の資料は少ないが、一一世紀中頃のものが出土している。⁽¹²⁾底径が胴部最大径に近づいた結果、胴部が半球状を呈する。口頸部は短く外反し、口縁端部下端が肥厚する。大きさは器高一二cm程度のものと器高九cm程度のものがある。この種の壺は一一世紀を通じてごく少量用いられたと推測する。

甕 甕は口縁部が「く」字状に外反する。口縁端部は上方に拡張するものと下方に拡張するものがある。口頸部内外面に横撫でを施し、胴部内面に撫で、胴部外面に横位の平行叩きを施すものが多い。

小結 一一世紀の須恵器の器種は一〇世紀の構成を踏襲するが、重点は甕・すり鉢に移る傾向が現われる。また特に、一一世紀中頃以後、すり鉢を中心として器形が多様になる。このことの背景には供給地の多様化という大きな変化がある。

(4) 一二世紀の須恵器 (第六図)

一二世紀の須恵器は当初においては壺・甕・すり鉢があるが、中頃以後はそれまでとは異系統のごく少量の壺を除くと甕・すり鉢から成る構成になる。

一二世紀初めの資料としては、白河北殿北辺 SE 二二・SE 四〇・E 一二層⁽¹³⁾ 京都大学病院西構内 AF 一五区 SE 一五、平安京左京八条三坊二町 G 21 P 11 出土品がある。

一二世紀中頃の資料としては、白河北殿北辺 SE 二六・SE 三〇、⁽¹⁴⁾鳥丸線 № 51 土壙 二六・№ 五五土壙 一二・№ 六一井戸

六出土品があり、平安京左京四条三坊十三町SE四二三にも当期の資料が多い。^(三〇)

一二世紀末の資料は、平安京左京八条三坊SD二四、^(三一)白河北殿北辺SE一八・SD一一中層、^(三二)鳥丸線№七三土壙五五、^(三三)三条西殿D三小土壙群№一四、^(三四)平安京左京八条三坊二町G七P一一・G一八W一出土品、^(三五)京大医学部遺跡AO一八区SE八出土品がある。

すり鉢

一二世紀初めには口径二〇cm程度の小型のものでは、口縁端面が外面と直角をなし、外方にかなり突出する。良好な資料は報告されていないがこの特徴をもつ大型のものもあったと推測する。なお大型で口縁端面の外方への突出が顕著でないものもあり、これは次の時期に主流となる。このほか外方に踏んばる高台のつくそれまでには例のないものがあり、また前後の時期の資料から判断して口縁端面を丸くおさめるものもあったと推測する。一二世紀中頃には口縁端面が外面とほぼ直角をなし外方への拡張があまり顕著でないものが多くなり、反対に上方に肥厚するものも現われている。

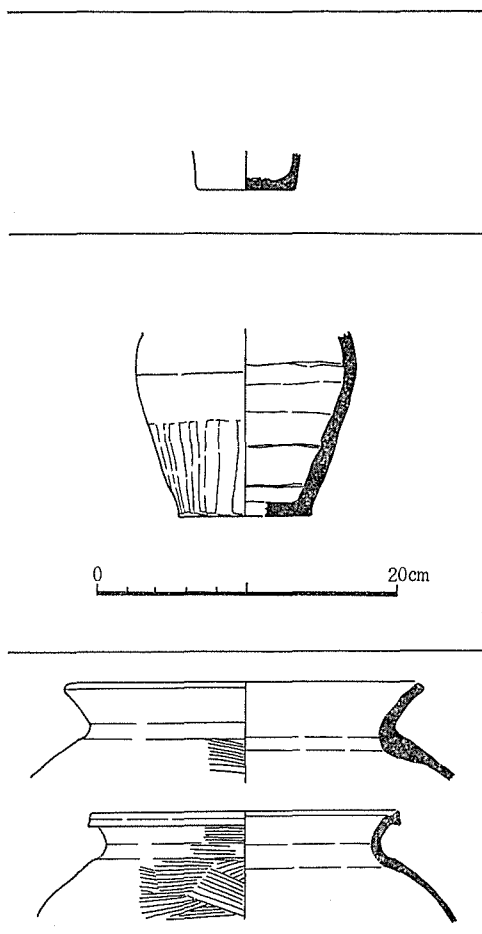
この外に口縁端面を丸くおさめるものや口縁部が外反し端面がほぼ水平をなすものもあるが比率は高くない。また小型の碗形の器形に高台と片口とを付けた珍しい例がある。一二世紀末には口縁端面が外面と鈍角をなすものが大多数を占めるようになる。また口径二〇cm程度のものが少なくなり、口径が三〇cmを前後するものが多い。以上の須恵器のすり鉢の変化は一二世紀中頃以後、播磨系の製品が主流になったことを示している。

壺 壺は一二世紀初めには従来の系譜をひく資料があるが、以後は確実な出土例がない。一二世紀中頃末には器壁が厚く胴部外面下半に縦方向の篋削りを施し、内面に粘土継目を残す粗製の壺が出土しているが、^(三六)以前のものとは大きな差異があり出土量も少ない。

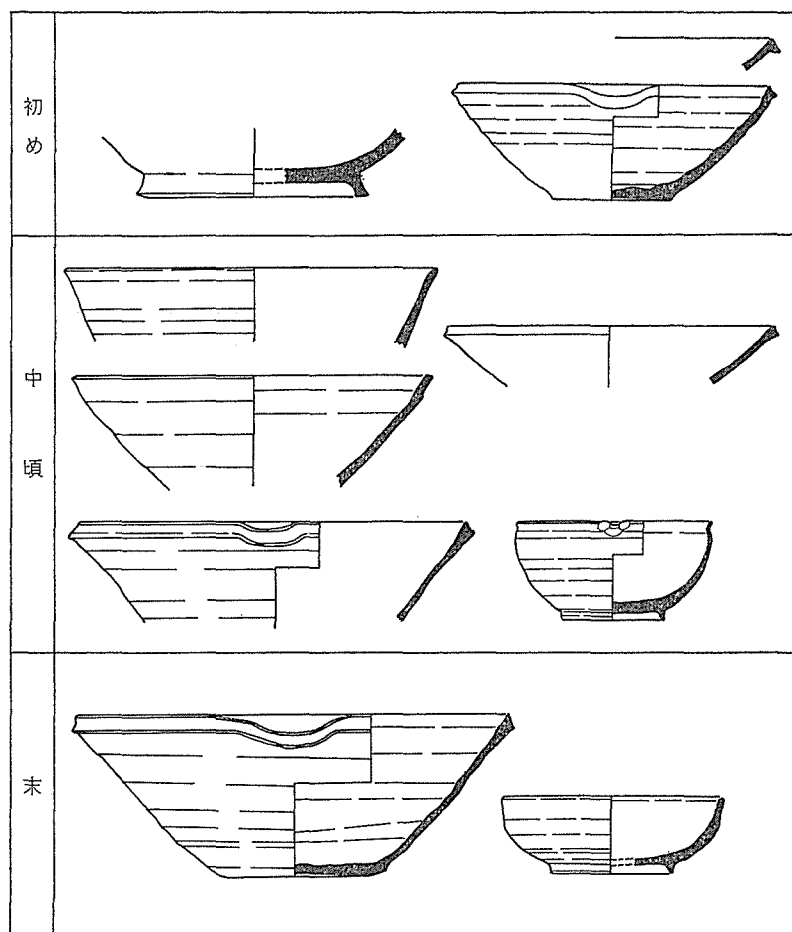
甕 甕について特筆すべき点は、一二世紀末には多様な甕が存在することである。この中には口頸部が短く丸味をもつて外反し球形の胴部外面と頸部外面とに右上がりをもつとする平行叩きを施すことから播磨産と推定できるもの、口頸部が短く外反して端部がわずかに肥厚し長胴・平底で胴部外面に格子叩きを施すことから讃岐産と推定できるもの、短い口頸

部が「く」字状に外傾し長胴・丸底の胴部外面に篋削りを、内面に刷毛目を施すことから備前産と推定できるもの等がある。^(二二)なおこれには常滑の甕の存在も付記しなくてはならないであろう。一二世紀初め～中頃の甕については不明な点が多いが、断片的な資料から一二世紀中頃を一二世末の様相の形成段階と推測する。

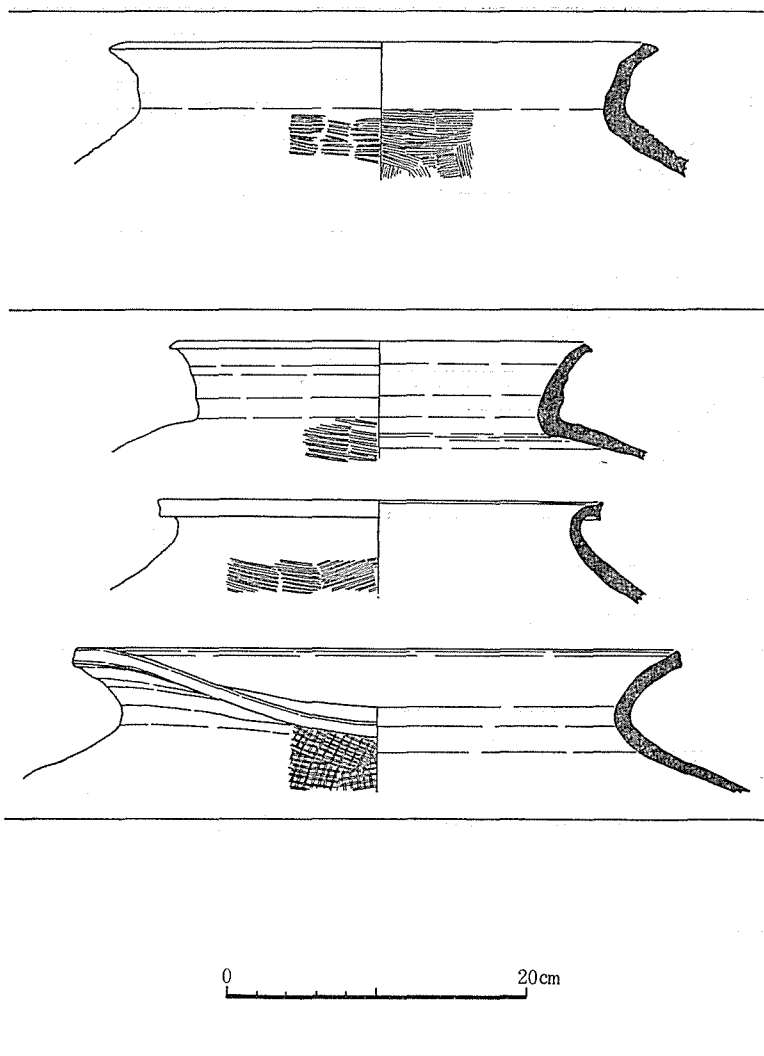
小結 一二世紀の須恵器は中頃を境として大きく変容する。すり鉢は多様であったものが播磨系の製品に統一されるようになる反面、甕は瀬戸内西部を中心とする西日本各地の製品がもたらされて一層多様になる。また壺は非常に例外的な存在となる。この須恵器の壺・甕・すり鉢にそれぞれ独自の動向が生じたことは、消費地における食器の構成と生産地における生産体制の大きな変化とかわるものであった。



須恵器（縮尺 1/5）



第6図 12世紀の



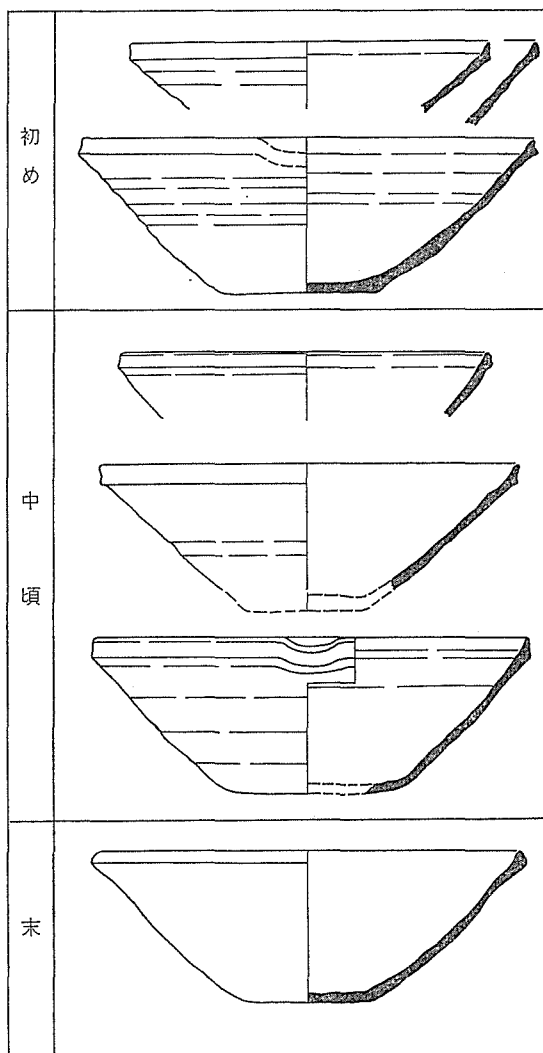
須恵器（縮尺 1/5）

(5) 一三世紀の須恵器（第七図）

一三世紀の須恵器は、甕・すり鉢を主とするが、次第にすり鉢の比率が高まっていく。

一三世紀初めの資料としては平安京左京内膳町SK一一八・SK三八五・SD三四五下層、^{〔三〕}京都大学医学部AO一八区SK一六、^{〔三〕}烏丸線№五六井戸5・^{〔三〕}№七二土壙七三、^{〔三〕}平安京右京八条二坊SD一、^{〔三〕}平安京左京八条三坊二町G二七W一出土品がある。

一三世紀中頃の資料としては、烏丸線№四八土壙二B・№六〇土壙二五、^{〔三〕}京都大学本部構内AX二八区SK五一、^{〔三〕}平安



第7図 13世紀の

京左京内膳町SD三四五上層、平安京八条二坊SD一、平安京左京八条三坊二町G四P一九、同志社中学体育館建設予定地SK二三三、常盤井殿町SK四〇一出土品がある。

一三世紀末の資料としては、白河北殿北辺SD六・SE一五・SE一七・SE二四、京都大学教養部構内SK二、平安京左京内膳町SK一五四・SE三二六、烏丸線Na四八土壙二A、平安京左京八条三坊二町G四〇P四出土品がある。

すり鉢 一三世紀初めには口縁端面が外面と鈍角をなし上方にややつまみ上げる結果、先端がやや外反するものが多く、反対に口縁端面がわずかに丸味をもつものもある。口径は二五cm程度のものと三〇cm前後のものがある。一三世紀中頃には口縁端部の上方への拡張が顕著なものがある反面、口縁端面とその上端が丸味をもつものがある。一三世紀末には口縁端面の丸味が顕著なものが多く、口径二五cm程度のものが少なくなり、二八〜三〇cm程度のものが増す。以上の須恵器すり鉢は一四世紀の資料も含めて、すべて播磨の製品と推測できる。

甕 甕は一三世紀末と同様に西日本各地の製品があるが、一三世紀中頃を境にして次第に常滑の甕に対する比率を減じていく。

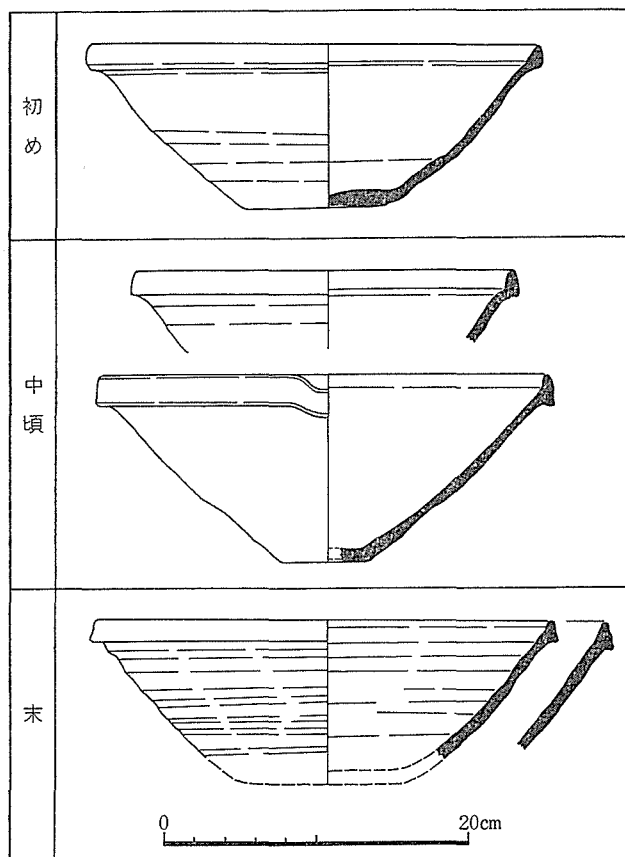
小結 一三世紀の須恵器は一二世紀末と同様に、甕、すり鉢を主体とするが、一三世紀中頃を境として、すり鉢の比率が高まっていく。このことは須恵器の流通用器種の一層の減少を意味する反面、その限られた器種については大量生産の進展、西日本一帯への供給という側面をもっている。

(6) 一四世紀の須恵器 (第八圖)

一四世紀には甕も一定量は存在するが比率は低く、すり鉢という一つの器種を中心とする。

一四世紀初めの資料としては、京都大学教養部構内SE一・SE三、烏丸線Na六七土壙一五・Na八〇土壙五一、白河北殿北辺SD八、常盤井殿町SK三〇六、法住寺殿跡G二五井戸出土品がある。

一四世紀中頃の資料としては、烏丸線Na三七土壙一三・Na六六土壙八、白河北殿北辺SK八、京都大学医学部AP一九



第8図 14世紀の須恵器（縮尺 1/5）

区SK五三⁽¹⁾、平安京左京内膳町SE二五五・SE三七二・SK一五八⁽²⁾、平安京左京八条三坊SE一⁽³⁾、平安京左京八条三坊二町G二P一・G八P二⁽⁴⁾、常盤井殿町SE四〇二⁽⁵⁾、同志社大学新町別館SD〇〇一⁽⁶⁾、平安京左京三条三坊十一町土壙一四⁽⁷⁾出土品がある。

一四世紀末の資料としては、鳥丸線G区二二EⅡ土壙一・Na七二土壙四〇・Na七二土壙三九・Na七八土壙九⁽⁸⁾、法住寺殿跡I一三井戸出土品がある。

すり鉢

一四世紀初めには口縁部の上方への拡張が著しくなり、端部は丸味をもつ結果、口縁帯を形成するようになる。法量は口径二八～三〇cm程度・器高一〇cm余のものが多く、一四世紀中頃には口縁端部下端の肥厚が顕著になり、一四世紀末にはこれが最も著しくなる。法量には大きな変化がない。

甕 甕の資料は少ないが、胴部外面に細かい綾杉状の平行叩きを施すものがある。なお一四世紀中頃には、口縁部が玉縁状で酸化焙焼成に転じた備前の甕が現われて

いる。^(二)

小結 一四世紀の須恵器は、すり鉢を主体とし、かつすり鉢の大多数を須恵器が占める。なお以後の時期に増加する備前のすり鉢は一四世紀末と推定できる資料がごく少量あるだけである。^(三)これに対して甕においては須恵器の比率が低下する一方、備前の甕が漸増する。そして一五世紀になると須恵器のすり鉢も常滑の甕とともに少量は用いたであろうがあまり出土しなくなり、備前のすり鉢・甕が主流になっていく。

① 泉拓良編『白河北殿北辺の遺跡』京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ
(一九八一年)

② 清水芳裕ほか「土師器の時期区分と年代表記」(京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五年度、一九八一年)

辻祐司「右京二条二坊(2)」(京都市埋蔵文化財研究所編『平安京跡発掘調査概報』昭和五十六年度、一九八二年)

平尾政幸・辻純一「左京二条二坊(2) 高陽院跡」(京都市埋蔵文化財研究所編『平安京跡発掘調査概報』昭和五十六年度、一九八二年)

堀内明博『北野庵寺』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第七冊(一九八三年)

三 五つの画期

以上で平安京・京都出土の九〜一四世紀の須恵器について変化の概略を示したが、この中に画期と考える大きな変化が五つある。これをもとに上記の須恵器を表一のように分期したい。以下ではこの各期について変化の様相を示すことにする。

須恵器Ⅳ期 八世紀後半になると須恵器に法量の縮小・法量による分化の不明確化・供膳用杯類における比率の減少と

③ 宇野隆夫「平安京・京都出土の須恵器資料」(東播系須恵器研究会資料、神戸市立博物館、一九八四年三月二五日)

④ 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』Ⅶ、奈良国立文化財研究所学報第二六冊(一九七六年)

⑤ 前者は平城宮Ⅵ期土器に、後者は平城宮Ⅶ期土器に一致する特徴をもつ。前掲注④文獻。

⑥ 伊野近富氏が平安京右京一条三坊九町SD四五の資料を分析した。^(四)

⑦ 筆者は報告書でSD一一中層・上層をそれぞれ一三世紀初め・中頃に比定したが、一三世紀中頃の良好な資料が増加した結果、現在は一二世紀末・一三世紀初めと考えている。

⑧ 堀内明博氏に御教示を戴いた。

表1 須恵器の時期区分

中世前期		古代後期		古代前期→7C		時代区分
後半期				前半期→5C		須恵器の時期区分
Ⅷ期	Ⅶ期	Ⅵ期	V期	Ⅳ期後半	Ⅳ期前半	
一三世紀末～一四世紀末	一二世紀中頃～一三世紀中頃	一一世紀中頃～一二世紀初め	一〇世紀初め～一一世紀初め	九世紀中頃～九世紀末	八世紀後半～九世紀初め	

いう変化が生じる^①。そして九世紀の須恵器は八世紀後半の基本的な器種構成を保ちつつ、この傾向が一層進んだ。このうち須恵器の比率についてみると九世紀初めにはすでに出土総量の一〇％以下であることが多く、九世紀末と大きくは変わらない^②反面、供膳用器種における法量による器種分化の不明確と簡略化、調整の省略は九世紀中頃に特に著しくなる。

この須恵器の変化が何にもとづくかの手掛かりは土師器と施釉陶磁器とにある。土師器の八世紀後半における顕著な変化は碗Aの増加であるが九世紀中頃以後は径高指数を減じ、杯Aとの区別が難しくなる。他方、九世紀初めの施釉陶器のうち灰釉陶器（白瓷^{しろし}）は壺類を主とし碗・皿類は報告例がない。また緑釉陶器の碗・皿類もごく少量である。それに対して九世紀中頃以後には中国製を含む施釉陶磁器の碗・皿類、特に緑釉陶器が増加し、九世紀末には供膳用の須恵器を凌ぐようになる^③。

これらの点から、Ⅳ期前半は須恵器が互換性をもつ土師器に対して比率を減じた段階、Ⅳ期後半は土師器・須恵器が施釉陶磁器の進出によって変容していった段階とすることができると推測できる。この動向が一〇世紀の食器の様相を生むことになる。

それではこの時期の平安京出土須恵器は、どこでつくられて都へ運ばれたのであろうか。九世紀の須恵器には胎土にいくつかの種類があり、複数の産地で生産されたと推測できる。この点について杉本宏氏は、五群を識別するとともに、その内の二群が、和泉陶邑窯の製品である可能性が高い平城宮出土第Ⅰ・Ⅱ群須恵器^④の特徴と一致すること、及び第Ⅰ群須恵器とその焼成不良品である可能性をもつ須恵器（Ⅲ群）が多く、胎土の別と器種の対応があまり明確でないことを明らかにしている^⑤。

これらの須恵器のうち和泉以外の製品の生産地の候補と

しては当然『延喜式』に陶器（須恵器）輪調国として記す美濃・近江・摂津・播磨・備前・讃岐・筑前の七国をあげなくてはならないであろう。しかし九世紀において重視すべき点は洛北の緑釉陶器窯でも須恵器が生産されていた可能性が高いこと、『延喜式』に載らない丹波国が重要な役割を果たしたであろうという二点である。

平安京北郊の京都市北区上賀茂本山に所在する本山窯は官窯と推定できる九世紀の緑釉陶器生産址として著名であるが、ここからは緑釉陶器や施釉すると緑釉陶器になる土器に混って須恵器が採集される^⑤。また瓦の生産で知られる京都市左京区岩倉幡枝町の栗栖野瓦屋付近からも緑釉陶器・須恵器が出土している^⑥。なおこれらの須恵器出土地においては窯体が確認されていない。また本山窯からは中国製陶磁器も採集されていて、すべての資料が当地で生産されたものとは確言できないであろう。しかしこれらの須恵器資料には焼きひずんだものがあり、器種には杯・皿・壺・甕がある。

このことから九世紀には平安京北郊に須恵器・施釉陶器という京で使用する陶器一式を供給する体制があったと考える。それは官の直接的な支配下にあったに違いない。

また京都府亀岡市篠町に所在する丹波篠窯は八世紀末以後に著しく生産を高めるが、その理由はおそらく須恵器を平安京に供給したからであろう^⑦。

九世紀の須恵器は、当初は和泉陶邑窯の製品も多かったであろうが次第に平安京北郊や丹波の製品が増したと推測する。現在その比率の変化を計算することはできないが、注意すべき点は胎土と器種との間にそれほどの対応関係がないという点である。これは各生産地が特に特定の器種を定めず須恵器を供給したことを示している。このことが後半期の須恵器との違いを知る上で重要である。

須恵器Ⅱ期 平安京出土の須恵器は一〇世紀に入ると急速に様相が変わる。供膳用の須恵器碗・皿類が全く出土しなくなるわけではないが、土師器は勿論、施釉陶磁器と比較しても著しく少ない存在になる。また多くの器種があった壺も壺Ⅰの系譜をひくものだけになる一方、貯蔵用の大型甕とすり鉢の多くを須恵器が占める。すなわち多様な器種・法量の方

化を特徴としたそれまでの須恵器が、V期にはほぼ壺・甕・すり鉢に限られるようになり、また法量の分化も大・小の二種程度になるのである。

これを供給体制という点からみると、さらに重要な変化がある。九世紀末以後には京近郊の窯業生産の中心地が洛西の京都市西京区大原野石作り町・小塩町に移るが、それとともにこの地では急速に緑釉陶器専焼の体制に移行していく。^⑧そして平安京出土須恵器の多くは丹波篠窯の製品と推定できるようになる。

V期前半（一〇世紀前半）の平安京の食器構成をみると、碗は平安京西郊産の緑釉陶器と東海地方産の灰釉陶器が主でありこれを他地域の緑釉陶器・中国製陶磁器・黒色土器が補完する。それに対して浅い杯・皿は平安京北郊の製品と推測する土師器が大多数を占めてこれを各種陶磁器が補完する。そして壺・甕・すり鉢の多くを丹波系須恵器が占めるのである。私はこの九世紀とは異なる食器構成法の出現を土器と陶磁器の地域・器種分業体制の成立と呼び、当期の土器様式を畿内の中世土器様式の原型と考えている。この食器構成法を基本としつつ構成要素が変わっていく中で、より発達した地域分業と流通の体制とに基礎をおく中世土器様式が確立したと考える。たとえばV期後半（一〇世紀後半～一一世紀初め）には、平安京西郊の緑釉陶器生産が衰退し、篠窯をへて近江系緑釉陶器がとって変わる。

須恵器生産地の丹波篠窯の側からみると、また重要な問題点が浮かび上がってくる。ここにおいては器種が壺・甕・すり鉢に限られるわけではなく多数の供膳用碗・皿類も生産しているが、このことは篠窯の須恵器の流通に二つの相が現われてきたことを示す。^⑩すなわち在地には従来通り須恵器の食器一式を供給するのに対して、平安京への搬出においては壺・甕・すり鉢という特定の器種が流通性をもつようになったのである。

また一〇世紀における和泉陶器窯の須恵器生産の衰退と歩調を合わせるように平安京だけでなく畿内各地に丹波篠窯の製品がもたらされるようになるが、^⑪この場合にも供膳用の碗・皿類はほとんど流通しない。この丹波篠窯の須恵器の流通における二相を、食器一式の供給・特定器種の広域流通と呼んで区別したい。

以上の須恵器Ⅴ期の大きな変化がどのような背景のもとで進行したかを考古資料のみによって明らかにすることは難しい。しかし土器と陶磁器の地域・器種分業体制の成立の直接的な契機は、おそらく公権力が直轄した畿内の窯業生産体制の変質と衰退にあったであろう。また特定器種の広域流通という相の顕在化は以後の食器構成の動向を決定づけた。この後、畿内は畿外からの流通品とやはり特定器種生産に転じた在地の土器とを組み合わせ、食器を構成するようになる。

なお食器が遠隔地に運ばれるという現象は一〇世紀以前・縄文時代に至るまで決して珍しいことではない。また量のみを問題にするならば中世を通じて在地の製品が九〇%以上を占める。しかし食器は貯蔵・煮沸・調理・供膳の各機能をもつ器種からなる複合体であり、一〇世紀以後の畿内においては畿外からの特定器種の流通がなくては食器構成が成り立たないという所に質的な変化があると考ええる。

須恵器Ⅵ期 一一世紀中頃になると、須恵器の器種構成には大きな変化がないが、すり鉢を中心にして器形が多様になる傾向がある。これはⅤ期には丹波篠窯から安定的に須恵器が供給されていたのに対して、Ⅵ期には篠窯の製品の比率が減じ、供給地が多様化したためと考えうる。その新しい供給地を同定することは難しいが、この中には後に重要な役割を果たすことになる播磨系の製品が含まれている。

この須恵器Ⅵ期の変化の重要性は、やはり他の種類の土器・陶磁器との関係で理解しうるであろう。一一世紀中頃は国産施釉陶器の衰退、瓦器の出現、中国製陶磁器（白磁）の相対的な比率の増加という時期にあたる。また碗の占める比率の減少を絵巻資料により汁物用の漆器碗の普及と考え^②るならば、平安京においては須恵器Ⅵ期がその普及期になる。

そして、瓦器・中国製陶磁器・播磨系須恵器に東海地方の白瓷系陶器を加えるならば、中世前期の京都を特色づける品目が出揃ったという評価を与えることができるであろう。須恵器Ⅴ期（一〇～一一世紀初め）において、平安京の食器構成法は特定の在地生産器種と特定の畿外からの流通器種とを組み合わせ形成するという点で中世的であっても、それを構成する要素は緑釉陶器・灰釉陶器・丹波系須恵器・黒色土器のように中世にはすたれるか変容するものが重要な役割を果た

していた。それに対して須恵器Ⅴ期に比率を高めた食器は、播磨系須恵器をはじめとして中世前期を通じて大いに活躍することになる。

この理由から平安京においては須恵器Ⅴ期をもって中世的土器様式の成立としても誤りではない。ただし私は当期を中世的土器様式の確立過程と評価している。その一つの理由は播磨においては、丹波篠窯と同様に多様な器種を生産し、同じような二相の供給を行っていたことであり、^⑬他の一つは新出の多様な食器がその用途の分担を明確にするのは次の時期と考えるからである。

須恵器Ⅵ期 一二世紀中頃～末における顕著な動向は須恵器のすり鉢における播磨系製品の独占である。そしてすり鉢全体についてみても白瓷系陶器（常滑）のすり鉢の比率は低く、播磨系須恵器のすり鉢が卓越する。それに対して甕は西国諸国の須恵器が運ばれる。さらに重要なことは甕においては常滑の製品がかなりの比率を占めかつ比率を高める傾向にあることであろう。また壺については須恵器は例外的な存在であり、中国製白磁の壺が最も多く常滑の壺も少量ある。そして供膳用の碗は漆器を別にするならば中国製青・白磁が主体をなし、皿は土師器が圧倒的に多い。^⑭また煮沸には土師器にかえて瓦器の土釜・鍋を用いるようになる。この播磨系須恵器のすり鉢、常滑の甕、中国製陶磁器の碗・壺、在地産の土師器の皿と瓦器の土釜・鍋を主として組み合わせる高度な食器複合が中世前期の京都の基本的な在り方である。

これを生産地の側からみるとまた大きな変化がある。播磨東部の兵庫県神戸市垂水区神出町神出窯や同明石市魚住町魚住窯において、この頃に供膳用の碗・皿類が著しく比率を減じ、すり鉢・甕の生産に重点を移す。^⑮そしてそれとともに、特にすり鉢を京都だけでなく瀬戸内・畿内を中心とする広い地域に供給するようになる。^⑯この生産地における碗・皿類の減少は須恵器Ⅴ期に生じた流通の二相のうち、特定器種の広域流通という相が卓越してきたことを示している。

常滑にも同様の現象があることは檜崎彰一氏がつとに指摘している。^⑰すなわち常滑では壺・甕・すり鉢を大量に生産し、東海地方一円から東国にかけて供給するが、特に流通性をもった壺・甕は西日本にも広くもたらされている。

これらの生産地における生産体制の変革は消費地における高度な食器複合の形成、及びそれを可能にした流通の発達と密接な関係をもっていたであろう。この段階をもって京都における中世的土器様式の確立と評価したい。

須恵器Ⅷ期

一三世紀中頃を境にして播磨では碗・皿だけでなく甕の生産を減じ、すり鉢専焼の体制に近づいていく。^⑩

そして京都においては播磨系の須恵器のすり鉢がすり鉢のほとんどを占める一方、甕では常滑の製品がさらに比率を増す。^⑪ 当期の京都の食器構成は、須恵器Ⅷ期の様相を一層進展させたものである。そして播磨の須恵器生産が、すり鉢専焼の体制になるとともに、その流通圏は西日本一円と関東地方という広大な地域に広まる。^⑫ この現象は常滑の甕の分布と重なりつつ、各地の食器の構成の上で大きな役割を果たしたであろう。この様相が須恵器の究極的な姿を示している。なおⅧ期後半（一四世紀中頃）末には、備前の玉縁口縁の甕に加えて、少量の備前のすり鉢と瀬戸の施釉陶器があり、中世後期の様相への転換の前兆とみなしうる。

須恵器の終焉

一五世紀になると播磨系須恵器のすり鉢は地方的な製品となって比率を減じ、酸化焰焼成による備前のすり鉢におきかえられていくが、この現象は単なる生産地の交替にとどまらない重要性をもっている。この変化は正確には、特に東海地方より西において、播磨のすり鉢と常滑の甕が、備前のすり鉢と甕とにとってかわられたと表現するべきものである。これには二つの側面がある。

第一は中世後期に備前の陶器が広く特産的に普及しえたことは、須恵器や白瓷系陶器が、長い期間をかけて達成した流通圏を抜きにしては理解しえないという点である。第二は備前にはそれまでとは異なる傾向が現われている点である。

一〇世紀から一四世紀の須恵器は、器種を減少させるかわりに、生産量と流通圏とを拡大するという一つの方向性をもっていた。そしてその製品は常滑や中国や在地の製品と補完しあいながら消費地の食器を構成したであろう。それに対して中世後期の備前は甕とすり鉢及び茶陶としても用いた壺のように広域流通用器種が多様化を計りながら一層の集中的生産を指向している。^⑬ これに瀬戸系の供膳用施釉陶器が漸増することを加えるならば、一五世紀の動向はまだ一六世紀ほどに

は明確な形をとってきていないが、多様な器種の国産陶磁器が煮沸・汁椀以外の食器のほとんどをまかなうという京都では近世後期に確立する様相へむけて第一歩を踏み出したと評価したい。

① 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅳ、奈良国立文化財研究所学報第一七冊（一九六五年）

西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、一九八二年

吉田恵二『延喜式』所載の土器陶器『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、一九八二年

② 堀内明博氏、鈴木廣司氏が当期の資料の数量と比率とを計算している。

北野廃寺SK二一…須恵器の出土総量に対する比率八・五%、供膳用器種における須恵器の比率三・四%（総個体数二二三、九世紀末）。

北野廃寺SK二〇…須恵器の出土総量に対する比率九・八%、供膳用器種における比率二・四%（総個体数五八一、九世紀末）。

平安京八条三坊SD二九・枕・杯・皿における須恵器の比率七・一%（総破片数八九七五片、九世紀末を中心とする）。

③ 注②前掲文献。供膳用の須恵器をとした他の種類の土器・陶磁器の供膳用器種の数値を示す。

北野廃寺SK二一…緑釉陶器一・二、灰釉陶器〇・二、黒色土器〇・六、土師器二六・二。

北野廃寺SK二〇…緑釉陶器二・六、灰釉陶器〇・五、黒色土器〇・三、土師器一二・二。

平安京左京八条三坊SD二九…緑釉陶器一・五、灰釉陶器〇・九、黒色土器一・六、土師器九・四、中国製陶磁器〇・〇三。

なお中国製陶磁器については永田信一氏が九世紀後半から一〇世紀

にかけて陶磁器の二～三%を占めるようになることを示している。またその年代づけは堀内明博氏が行なった。

永田信一「平安京跡出土の越州窯青磁」『考古学ジャーナル』No.二一、一九八二年

堀内明博「平安京出土の初期貿易陶磁」（奈良県立橿原考古学研究所研究講座資料、一九八四年五月三日）

④ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ、奈良国立文化財研究所学報第二六冊（一九七六年）

⑤ 宇佐晋一「緑釉土器窯址本山遺跡とその周辺」『古代学研究』第一五・一六号、一九五六年

京都市埋蔵文化財研究所『坂東善平収蔵品目録』（一九八〇年）
京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五十六年度（一九八三年）

また森浩一・鈴木重治両氏の御好意により同志社大学所蔵資料を実見させていただいた。

⑥ 前掲注①第一・二文獻。

⑦ 安藤信策「国道九号バイパス関係遺跡昭和五三年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』一九七九年）

安藤信策、水谷寿克・山口博「篠栗跡群昭和五四年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』一九八〇年）

安藤信策・水谷寿克・岡崎研一・平本哲・広川徹也「篠栗跡群昭和五五年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』一九八一年）

水谷寿克「亀岡市篠簾跡群」(『京都府埋蔵文化財情報』創刊号)

堤圭三郎「亀岡市篠簾跡群」(『丹波史談』一二二号、一九八二年)

石井清司「篠簾跡出土の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第七号、一九八三年)

第七号、一九八三年)

京都府埋蔵文化財調査研究センター「篠簾跡群」(一九八四年)

⑨ 同遺跡を調査した寺島孝一氏に御教示を戴いた。

寺島孝一「石作篠簾跡の発掘調査」(『古代文化』第三一巻第一号、一九七九年)

一九七九年)

寺島孝一「畿内の緑釉陶」(『考古学ジャーナル』第二二一号、一九八二年)

⑨ 平安京左京八条三坊における一〇世紀前半の中頃の緑釉陶器底部六三七片について、京都周辺産五四四片、東海地方産三三三片、滋賀県産一〇片、不明四一片であることが示されている。

⑩ 前掲注⑨文獻。

安藤信策・吉水真彦・樋口隆久「国道九号バイパス関係遺跡昭和五二年度発掘調査概要」(『京都府教育委員会「埋蔵文化財発掘調査概報」一九七八年)

⑪ なお篠簾の須恵器と緑釉陶器との問題は本稿では保留する。

⑫ 橋本久和、尾上実氏をはじめとする方々に御教示を戴いている。

⑬ 安田龍太郎「絵巻物にみえる器類と考古資料との比較研究序論」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集、一九八二年)

なお飯は土師器の大型皿に、おかずと調味料は土師器の小型皿に盛られたとされるが、土師器がほぼ大・小二種の皿に限られる様相も一

一世紀中頃に確立する。

⑭ 森田稔氏の御教示を戴いた。

⑭ 平安京八条三坊SD二四(二世紀末)では須恵器の甕七二片、常滑と思われる焼締陶器の甕四〇片が出土している。また両者の比率が

同程度の例や、常滑の甕が多い例もある。

⑮ 甕は出土総量の一〇二%前後であり、京都の中心地においては八〇

%程度を中国製陶磁器が、残りを瓦器等が占めるであろう。なお周辺

部において中国製陶磁器の比率がやや低くなる。皿は九九%以上が土

師器であろう。

⑯ 森田稔氏の教示による。

兵庫県教育委員会「魚住古窯跡群」兵庫県文化財調査報告第一九冊

(一九八三年)

⑰ 荻野繁春、橋本久和、伊野近富、福田正雄氏をはじめとする方々に御教示を戴いた。

⑱ 橋崎彰一編『日本の陶磁』第二巻(一九七五年)

⑲ 前掲注⑩文獻。

⑳ 平安京左京八条三坊SE一(一四世紀中頃)では須恵器のすり鉢五〇片、焼締陶器のすり鉢三片、須恵器の甕三〇片、焼締陶器の甕一五四片である。

㉑ 荻野繁春「西日本における中世須恵器」(東播須恵器研究会資料、於神戸市立博物館、一九八四年三月二五日)

㉒ 備前焼Ⅳ期に窯の減少(統合・大型化)がなされたことには非常に重要な歴史的意義がある。

⑳ 間壁忠彦・岡壁霞子「備前焼研究ノート③」(『倉敷考古学研究会集報』第五号、一九六八年)

㉑ 橋崎彰一編『日本の陶磁』第三巻(一九七四年)

伊藤晃「備前焼の流れ」(岡山市教育委員会「古備前図録」一九八四年)

結 語

以上で平安京・京都出土の須恵器を中心にして、編年と私なりの意義づけとを行なった。須恵器は食器の一部であり、その変化は他の土器・陶磁器の動きと密接な関係をもっていた。従って本稿の結果は私の食器の変遷に対する評価でもある。畿内の都市から出土する食器を概観すると、特に有力な人の所有した高級品は別として、多様な器種・法量に分化した土師器と須恵器とが重要な役割を果たした古代、個々は簡素な構成から成る多くの種類の土器と陶磁器を用途に合わせて使いわけた中世、多様化した国産陶磁器が煮沸・汁碗以外の食器のほとんどを占めるようになっていく近世・近代の三期に大別できる。ただしその変化は簡単になされたわけではなく、いくつもの複雑な過程を経て達成されたのであり、各時代の中に重要な画期がある。この意味で古代後期から中世前期にかけて用いられた後半期の須恵器はその変化の過程を知るための一つの素材となろう。

九世紀の須恵器が前半期の最後の段階として煮沸以外の多様な器種を形成し、窯址の数も多かったのに対して、一〇～一四世紀の須恵器は器種と生産地の減少という一つの方向の変化を辿る。これが従来、須恵器の衰退過程と判断されることが多かった最大の理由である。確かに最も華やかな供膳用の器種から須恵器が撤退する直接の理由は土師器・施釉陶磁器にその座を譲るからである。

しかし器種・生産地の減少という現象を別の観点からみると、そこには集中的大量生産、及びそれと不可分の関係にある高度な流通体制・食器複合への展開という側面がある。実際に播磨の中世須恵器窯址に立てば、その生産量の莫大さを実感できるであろう。

そしてその過程をみると、平安京における需要の変質と特定器種の広域流通に示される流通体制の革新によって一〇世紀に確立した土器と陶磁器の地域・器種分業体制が重要な出発点になったと考える。この動向が一世紀中頃の大きな変

動を経て、一二世紀中頃の生産・流通・消費ともに中世的展開をとげる段階に帰結したのであろう。

そしてこの動きは休むことなく進行し、一四世紀には播磨系須恵器のすり鉢が西日本から関東地方に及ぶ流通圏を得るに至った。播磨系須恵器はここから真の衰退期に入り、その変化は食器史上の重要な転換点でもある。しかし須恵器の達成した生産と流通の水準は失なわれることなく、自らの中から派生した備前をはじめとする国産陶器に受けつがれて発展していくことになる。

それではこの平安京・京都の食器は畿内の中にあつてはどのように位置づけうるであらうか。

平安京・京都出土の食器と畿内各地とりわけ畿内南部出土の食器とを見比べると非常に異なる印象を受ける。それは在地生産の土器に地域色があることに由来するが、主な理由は、畿内の多くの地域では供膳用の椀に黒色土器・瓦器を多用するのに対して平安京・京都では、緑釉陶器・灰釉陶器・中国製陶磁器とおそらくは漆器を多用するからであらう。ただし須恵器をはじめとして、それ以外のものに注目すると、在地産の土器と畿外からの流通品とによって食器を構成する基本的な在り方は共通している。

平安京・京都の食器と畿内各地の食器の相違は、一部の器種における高級な製品の量の差であり、後半期の須恵器の時期はその差が最も顕著であった時代である。このことは重要な意義をもっている反面、畿内を総体としてみるならば、土師器系の土器（土師器・黒色土器・瓦器）以外の食器生産がすたれ、発達した流通の体制によって他の必要な製品を入手するようになる地域とみなしうる。

それではこの畿内の様相は当時の日本の中にあつてどのような位置にあつたのであろうか。この点は本稿で用いた資料では論じえない所であるが簡単な見通しを示しておこう。

中世前期において基本的な食器を自給しえたのは、土師器・須恵器生産が盛んであつた瀬戸内地方・北陸地方、白瓷系の陶器生産が隆盛した東海地方であつた。この内、瀬戸内地方と東海地方とは製品を恒常的に他地域に供給する能力が

あったが、東海地方には他地域の製品がほとんど入らないのに対して瀬戸内地方には一定量の東海地方の製品が流通するという差異がある。また北陸地方は壺・甕・すり鉢を自給し白瓷系陶器の生産も始めるが、中世前期においては他地域への搬出をあまり行なわない。また生産と供給が発達する地域としては同安窯・竜泉窯をはじめとする中国南部の陶磁器生産地も付け加えなくてはならないであろう。

これらに対して、大量の中国製陶磁器を入手した北九州地方、先述の畿内、及び東国は大宰府・京都・鎌倉という都市をもち、自らの地域外からの流通品を不可欠の要素とする地域である。これらの消費が発達する地域は窯業の分野で競争に敗れた地域ともみなしうるが、むしろ必要な製品の一部を流通によって入手する経済力をもった地域と推測したい。

中世的土器様式の認識の難しさの一つの理由は、この各地域において独自の様相が現われる一方で、一定の共通する動向と流通の関係をもつことにある。そして程度の差はあるが生産地と消費地の広域流通の発達が生産地と在地の製品の器種分業を生むという共通の動向に中世の食器の特質があると考ええる。また古代後期はその形成期であったであろう。

古代前期と近世の窯業は、日本の各地で多様な器種から成る製品を生産した点において類似する所があるが、その生産・流通・消費の規模は全く異なる。そしてその規模の違いは両者と多くの点で異質にみえる古代後期・中世前期の様相と中世後期の展開を介在させてはじめて連続的に理解できるであろう。その動きの中で大消費都市である平安京・京都をもつ畿内は一定の重要な役割を果たしたのであり、その一端が後半期の須恵器に現われていると考える。

謝辞 本稿をまとめるまでに非常に多くの方々のお世話になった。樋崎彰一先生には、私が当期の資料に接するようになった頃から多くの御指導を戴いている。また鈴木重治・橋本久和氏をはじめとする中世土器研究会の方々には常々有益な御教示を戴いている。また一九八四年三月に神戸市立博物館で開催された東播系須恵器研究会において各地の調査・研究成果に接し得たことは本稿の根幹をなした。お世話になった喜谷美宣・丹治康明・森田稔をはじめとする諸氏に厚く御礼申し上げます。そして困難な条件の中で都市遺跡の発掘を実施し、秀れた報告書を刊行されている多くの方々に最大の敬意を表します。

〔平安京・京都出土須恵器報告文獻〕

- 〔一〕 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『遺跡調査年報』Ⅰ（一九八〇年）
- 〔二〕 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『遺跡調査年報』Ⅱ（一九八一年）
- 〔三〕 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『遺跡調査年報』Ⅲ（一九八二年）
- 〔四〕 京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』（一九七八年）
- 〔五〕 京都市埋蔵文化財研究所編『平安京跡発掘調査報告』昭和五十六年度（一九八一年）
- 〔六〕 京都市埋蔵文化財研究所編『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財調査報告第六冊（一九八二年）
- 〔七〕 京都市埋蔵文化財研究所『北野廃寺』京都市埋蔵文化財調査報告第七冊（一九八三年）
- 〔八〕 京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和五十七年度（一九八三年）
- 〔九〕 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内試掘立会調査概報』昭和五十七年度（一九八三年）
- 〔一〇〕 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五十二年（一九七八年）
- 〔一一〕 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五十二年（一九七八年）
- 〔一二〕 京都大学埋蔵文化財研究センター『白河北殿北辺の遺跡』京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ（一九八一年）

- 〔一三〕 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五十五年（一九八一年）
- 〔一四〕 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五十六年度（一九八三年）
- 〔一五〕 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五十七年度（一九八四年）
- 〔一六〕 京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（一九八〇年）
- 〔一七〕 京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（一九八一年）
- 〔一八〕 京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（一九八一年）
- 〔一九〕 古代学協会『平安京左京五条三坊十五町』平安京跡研究調査報告第五輯（一九八一年）
- 〔二〇〕 古代学協会『平安京左京八条三坊二町』平安京跡研究調査報告第六輯（一九八三年）
- 〔二一〕 古代学協会『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第七輯（一九八三年）
- 〔二二〕 古代学協会『平安京左京四条三坊十三町』平安京跡研究調査報告第一輯（一九八四年）
- 〔二三〕 古代学協会『押小路殿跡、平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告第二輯（一九八四年）
- 〔二四〕 古代学協会『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第三輯（一九八四年）
- 〔二五〕 同志社大学校地学術調査委員会『常盤井殿町発掘調査概報』（一九七八年）
- 〔二六〕 同志社大学校地学術調査委員会『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅱ（一九七八年）
- 〔二七〕 平安京調査会『平安京発掘調査報告左京四条一坊』（一九七五年）

（京都大学文学部助手）

C. The term *jitian yanggu* means that people in a country live on the grain harvested in some arable land which they borrow from another country and cultivate themselves. This practice was observed in five countries: Erqiang 婁羌, Shanshan 鄯善, Shanguo 山國, Puli 蒲犁 and Yinai 依耐; almost of which were situated in the periphery of the basin. And there lived nomadic people and a minority of peasants. The latter, who seem to have practiced *jitian yanggu*, took from two to nine days to get to the countries in the basin having oases for the purpose of doing this practice.

The latter phase of the Sue Pottery 須惠器

—Excavation in Capital Heian—

by

Takao Uno

As for the Sue pottery excavated in Capital Heian (Medieval Kyoto city), which were dated the 9th-14th century, the earlier ones had various forms. But after the middle or the end of the 9th century, only the definite forms of Sue pottery were used. This change doesn't mean the decline of them, but one of phenomena that the medieval pottery style came into existence in the Five Home Provinces 畿内. At the time, the several kinds of pottery and ceramics were used each in its proper way. In that process there is the important change. On the first phase, among the various forms of them made in the producing centers the definite forms of potteries circulated. Then, on the second phase, the forms for marketing were produced on large scale in the producing centers.

In this period the Five Home Provinces developed much more as a consumer area of the ceramic goods produced in Setouchi 瀬戸内, Tokai 東海 provinces than as a producing center of the ceramic industry. It is also in this period that the system of the production-circulation-consumption of the ceramics changed on large scale and that the development of its system after the late medieval ages was based.